GyouseiNews.Com
The Gyousei Chosa Shimbun
行政調査新聞

＜国内情勢＞

コロナ禍に増して猛暑に茹だるこの時期、さらに食欲も失せそうな某市長の批判記事の連打だけでは本紙読者も「もういいよ、あいつ（市長）は」と辟易していることだろう。本紙の活動には、各分野に精通する十数名もの「覆面記者」が参加している。 つまりメディアで活躍しながらも、スポンサー至上主義には抗えない商業ジャーナリズムでは腕を持て余す、魂の無頼たちが自ら寄稿してくることも珍しくない。

今回は、また新たな有識者が大胆な切り口で、混迷の日本政府の行方を予想してくれた。卑小な「おれ様市政」のテッペンから、カラオケ･デュエットをしてくれる女性を見つけようと血眼の某市長には縁もゆかりもない「本物の政治の世界」には、酷暑もしばし忘れそうなダイナミズムさえ立ち上ってきた。

コロナ禍で激変した世界が巻き起こした巨大な乱気流は、いよいよ腐敗仕切った日本の自公連立を打ち壊す神風となるか？ラムネ代わりのコラムをお届けする。

この秋、日本列島に『激震』が走る！

―総選挙前に政界に新しい枠組みが誕生する―

衆院は「任期満了総選挙」

オリンピック開幕中の８月３日、自民党の総裁選選挙管理委員会が初会合を開いた。自民党の総裁任期は９月末。９月中旬には総裁選が行われるはずだ。

だが今回は、状況が普通ではない。総裁選の日取りが1カ月以上後回しにされるかもしれないのだ。9月以降11月までの間に、衆議院総選挙が行われるからだ。衆院総選挙がどんな形でいつ行われるか、それによって自民党総裁選の時期が変わる。総裁選に立候補する顔ぶれも変わってくる。では衆院総選挙は、いつ行われるのか。衆議院議員の**任期満了は10月21日**。

任期満了になった場合には、10月末～11月に総選挙が行われる。戦後の歴史の中で任期満了総選挙となったのは1回しかない。昭和51年12月の総選挙だ。この選挙は、田中角栄の退陣後の総選挙で**「ロッキード選挙」**とも呼ばれる。

自民党には逆風が吹き、大敗北を喫した（**選挙後の公認追加で過半数は維持できた**）。このとき自民党が敗れた理由は、はっきりしている。

田中角栄ロッキード事件のためだ。ところがなぜか**「任期満了総選挙になると与党が敗れる」**といった風説が真顔で語られるようになってしまった。そんな背景もあってか、与党内には**「9月の総裁選前に解散に打って出ることが望ましい」**という声もある。8月の**オリンピックの好成績**（**史上最多のメダル獲得**）で、これまでコロナ禍で沈んでいた人々が明るくなり、菅義偉政権には**「追い風が吹く」**という読みがあるという。また**「選挙のタイミングなど考えず、コロナ対策に最善を尽くして、任期満了総選挙を迎えると、その姿勢が評価される」**との見方もある。

新聞情報によると、閣僚経験者の多くは**「解散でも任期満了でも、秋に総選挙が行われることは間違いない。どちらでも大差はない」**と落ちついて構える雰囲気があるようだ。しかし、オリンピックで日本のメダル数が増えたとしても、それが与党に追い風になるとは思えない。また、コロナ対策が万全だと考えている日本人は、たぶんゼロに近いだろう。それどころか、**ワクチン不足・入院制限**など、コロナは明らかに自民党を壊滅方向に押しやっている。

菅政権誕生以来、地方選では自民党候補が苦戦を続けている。4月に3回行われた国政選挙では自民党は全敗。先月に行われた東京都議選でも自民党は予想外の低得票で、議席数も過去2番目に少なかった。菅首相の求心力が落ちていることは誰の目にも明らかだ。**「菅首相では総選挙は戦えない」**という声が自民党の若手議員からあがっている。それも当然だ。自民党の中堅・若手が**「総裁選を実施して、新しい総裁、新しい執行部で総選挙に臨みたい」**と考え、水面下で

活動を展開している。こんな動きに、**菅政権を支えている二階俊博幹事長は反対**する。**「菅総裁を代える意義は見つからない」**というのだ。

総裁選はいつの時代にも**「現職が選ばれる可能性が極めて高い」**とも口にしている（**8月3日記者会見**）。**二階幹事長が菅義偉を支え続ける**のは当然のことだが、現在のワクチン供給不足・入院制限への不満は今後ますます大きくなる。

8月中旬の**お盆以降にはコロナ感染者数は膨大な数**になるだろうし、**パラリンピック開幕**（**8月24日**）以降の世界情勢が一段と怪しい雰囲気となっていることからも、総裁選や総選挙情勢が一気に変わる可能性が高い。

安倍晋三の再々登板はあるのか

米軍やNATO（北大西洋条約機構）軍の撤退が進むアフガニスタンを軸に、中東全域の枠組みが変わりつつある。米軍アフガン撤退期限は9月11日だが、**バイデン政権**は**「8月末を待たずに撤退は完了する」**としている。それを見据えて、中国はアフガンの**武装勢力タリバーンの代表団を中国に招待**（**7月28日**）、中国・アフガンの関係は今後ますます良化していくだろう。

中東は、とりあえず中国主導で緊張が弱まる。代わって緊張が高まるのは、東シナ海、南シナ海だ。

「8月中旬以降9月冒頭にかけて、国際情勢は大きく変わるでしょう。コロナ禍は収まるどころか国民の不安を増大させるところまで拡大する。オリンピック後の経済停滞も必然ですから、自民党内、特に若手議員たちの総裁交代要求は、9月に入ったとたんに急激に高まるものと予測しています」

こう語るのは大手新聞社の政治部記者。

二階幹事長がどんな手綱さばきをするか見ものだが、菅政権が火だるまに陥ったら、9月中ごろには総裁選が行われて当然。コロナのため崖っぷちに立たされていた**菅義偉**は、国際情勢の激変で消し飛んでしまうというのだ。では、**菅義偉**の後を受けて**次期自民党総裁となるのは誰**か。

「常識的に考えて岸田文雄でしょう。自民党執行部は菅続投で固まっている。しかしコロナ禍が拡大し、国際情勢が激変して菅続投が吹っ飛んだ場合には、首のすげ替えで岸田が浮上してきます。他にも候補の名はあがっています。

河野太郎や小泉進次郎を推す声もありますし、加藤勝信官房長官を推す声もあります。思い切って女性宰相をという声もあるほどですが、どれも現実的ではありません。どう考えても岸田さんでしょうね」　（前出の政治部記者）

しかし**菅義偉が岸田文雄に代わっても**、代わり映えはしない。顔が変わるだけで、中身は同じようなものだ。総選挙を戦う総裁として魅力に欠ける。本紙の周辺には「安倍晋三の再々登板」という声も聞こえてくる。

「もう一度、安倍という声が上がることは理解できますが、それはありません。安倍の評判は悪い。海外では、もっと悪い。安倍は首相在任中に『**海外バラまき政策**』をやっています。東南アジア諸国やイラク復興支援・インドの高速鉄道支援・パナマのモノレール建設支援・バングラディッシュの商業港建設支援など、途上国支援に総額 55 兆円以上にも及ぶＯＤＡ（政府開発援助）を乱発してきた。ところが、それが実行されていないのです」

安倍晋三が首相時代に海外にバラまいたＯＤＡなどは、60 兆円（日刊ゲンダイ、MAG ニュースなど）とされるが、ネット上には 70 兆円という数字も上がる。

だがＯＤＡは税金だけではなく民間投資も加えられている。安倍晋三が気前よくバラまいたものの、アフリカ投資などは半額にも満ちていない（朝日新聞デジタル他）。東南アジア諸国・中東・アフリカなどから「安倍はウソつき」との批判が相次いでいる。「あくまでうわさの域を出ない話なのですが」と断った上で、前出の政治部記者はこう語る。

「ＯＤＡに対してキックバック（割り戻し謝礼）が支払われます。日本では、まるでワイロのように思われていますが、海外ではキックバックは当然のこと。胸を張って受け取ることができるカネです。キックバックは総額の 0.1％から 0.5％が普通ですが、ときに 1％とか3％という話もあるようです」

50 兆円の 0.1％といえば 500 億円。1％で 5,000 億円。その予定していたカネが半額以下しか入ってこなかったら、さすがの安倍晋三も懐（ふところ）が寂しい思いをしているのかもしれない。

「桜を見る会にしても、モリ・カケ問題にしても、まだ完全決着がついたわけではない。菅政権は、いわば安倍晋三の傀儡（かいらい）政権ですから、安倍は『**陰の実力者**』のままでいいと思っているはず。わざわざ火の粉を浴びようとはしないでしょう」

安倍と二階は、仲が悪いという情報もある。菅義偉のバックにいて政権を切り盛りしているのは二階俊博で、安倍は放り出されてしまった感が強い。世間一般では「安倍･麻生･甘利」の「3A」と岸田が組んで、「菅＋二階」を追い落とすのではないかとの情報も流れている。そんな情報に、この政治部記者はこう語る。「そこが二階俊博のすごいところです。二階は6月に懇親会を開いた。秋の総選挙を睨んでの会合です。そこに安倍晋三を招いて挨拶をさせ、自分が作った議員連盟の最高顧問に据えてしまった。3Aのトップは安倍晋三で、その安倍を自分のところの議連に加えてしまったのですから、誰も盾つくことができないのです」

らつ腕・二階俊博の力の根源

二階俊博はどうしてこれほどまでに力を持つようになったのか。その理由は、安倍晋三にある。自民党は昭和 30 年（1955 年）の「55年体制」誕生以降、ずっと巨大政党として君臨してきた。その間に何度か政権与党の座から降りたこともあったが、何といっても日本最大、最強の政党である。

この巨大政党を動かしてきたのは「人事とカネ」を握る幹事長だった。そして、7年8カ月におよぶ超長期政権を運営してきた安倍晋三は、幹事長の権力を一段と強化させてしまったのだ。民主党政権をひっくり返して第二次安倍政権が誕生したのは平成 24 年（2012 年）12 月。そのときの幹事長は石破茂だった。

2年後の平成 26 年には谷垣禎一が幹事長となり、安倍政権が不動で安定した状態となった平成 28 年から5年以上、二階俊博が幹事長のポストについている。「人事とカネ」は、二階の手の中にある。党の予算を最終的に決済できるのは幹事長だけだ（自民党の収入は公式的には年間約 430 億円）。自民党の歴代幹事長といえば、大派閥から出るものと決まっていた。だが二階俊博は小さな派閥に属している。どうしてここまで強大な権力者になれたのだろうか。週刊誌やマスコミ、あるいはネットを探しても、なかなか本当のことは出てこない。

「二階は野中広務の財産を継承した。財産といってもカネではない。野中のあらゆる人脈を継承したのだ」　こう語るのは、かつて野中広務の下で働いていた実力者のS氏。野中広務とは官房長官や幹事長をやった自民党の超大物だ。中国や北朝鮮とも深い人脈を巡らした政治家で、毀誉褒貶（きよほうへん）の激しい人物でもある。S氏は語る。

「オヤジ（野中広務）の評価は、良しも悪しもいろいろある。私としてはオヤジの最大のミスは、後継者を二階にしたことだと思っている。平成 19 年（2007 年）に神戸で『世界華僑大会』が開催された。このときには世界中の大物華僑が 2，000 人集まり、日本からも政財界の大物が 1，600 人も参加している。

当時は日本中の大企業、中小企業の目は中国に向いていた。華僑大会開催に向けて資金提供を呼びかけたところ、莫大なカネが集まった。総額がどれくらいかはわからないが、常識的に考えて、200 社から平均1億円は出ただろう。

その中から二階は5億円をつまみ食いしたのだ。それを知ったオヤジは渋い顔をしていたが黙っていた。黙認したも同じだ。何があったかは知らないが、オヤジの最大の失策は二階を自分の後継者にしてしまったことだ」

この話のウラは取れていない。だが**二階俊博**という男のカネに対する執着心は、この話からも伺える。

天変地異が起これば石破茂が登場する

話を自民党総裁選に戻そう。

何ごともない平穏無事な時代だったら、**1年間総理総裁を務めた菅義偉**が続投するのは当然の話だ。何ごともなければ、である。しかし**菅義偉**には申し訳ないが、今は何ごともない時代ではない。コロナ騒動は日に日に拡大し、日本中の庶民大衆は不満に溢れている。コロナの拡大は**菅政権が引き起こしている**ものではない。立憲民主党が政権を握ろうが…共産党政権が生まれようが…コロナの拡大に歯止めがかかることはない。国民大衆の末端までがコロナの重大性や、その深い意味を理解しないかぎり、コロナは拡大・縮小を繰り返し終わることがない。そして追い打ちをかけるように、自然災害が続出する。

北米を襲った異常高温は各地で山火事をひき起こした。**ドイツとベルギーを襲った大洪水は異常気象**が生み出したものだ。**中国の河南省でも大洪水**が起きた。

今は、地球そのものが荒れ狂う時代になっている。太陽黒点の減少は、これからも**天変地異が続発する**ことを暗示している。この先、私たちを苦しめるのは、コロナだけではない。台風による豪雨や土石流などの災害あるいは巨大地

震かもしれない。何が起きるかわからないが、**天変地異が襲ってくる可能性**が高まっている。総裁選にその言葉がからんだことがあった。

昨年、４度目の総裁選に敗れた**石破茂**が、敗戦の弁として**「天変地異でもなければ私は総裁になれないのか」**と語っていたのだ。その**「天変地異」**が起きようとしている。**石破茂本人**は予言をしたつもりではなかっただろうが、天から降ってきた声を聞いたのかもしれない。**石破茂は安倍晋三のライバル**だった。実力伯仲の好敵手だった。

安倍は中央に強く、石破は地方で強かった。国会議員票では**安倍の得票**が多かったが、**地方議員票は石破**が上だった。コロナ禍が吹き荒れ、国民の多くが菅政権に愛想をつかしている今こそ、**自民党の実力者、石破茂が出馬**すべきときなのではないのか。**安倍政権を引き継ぐ菅政権ではない**、新たな自民党政権を作るとしたら、**石破茂以外にない**。だが昨年の総裁選に敗れた**石破**は、自分の派閥である**「水月会」**を飛び出してしまった。

石破は、もう、派閥の領袖ではない。また**二階・菅、あるいは3A（安倍・麻生・甘利）**や**岸田**と組むこともない。**一匹オオカミとなった石破**が総理総裁になることなど、常識的には考えられない。そう、常識的にはあり得ない。

だが、そもそもコロナ騒動など非常識な話なのだ。この先、おそらく８月中に、遅くとも９月に入れば、地球はこれまで以上に荒れ狂い、世界情勢は混乱に向かい、手の付けられない状況に陥るだろう。そんな**天変地異の時代に立ち上がる**ことができるのは、**石破茂**ではないのか。

石破が、自民党を割って出る可能性もある。そのとき、実力者に同調して自民党を飛び出すグループが現れたら、野党の一部が合流する可能性が高まる。

それは日本の政治世界の枠組みが変わることを意味する。コロナ騒動の最中に災害か地域紛争か、地球規模の激変が起きれば、そのときに日本の政界の枠組みがガラガラと音を立てて崩れていく。庶民大衆が望んでいるのは安定した自公政権ではない。**新しい枠組みである。**■